

HISTORY

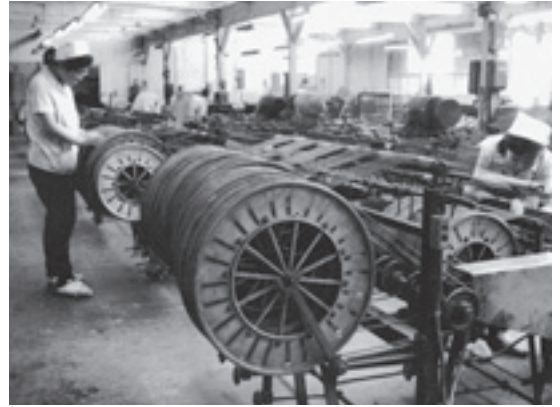
時代を超えて織りにこだわる。

高田織物は日本のシェア35%以上をもつ畳縁のトップメーカーです。その歴史は1890年頃までさかのぼります。当時、倉敷市児島の名産であった真田紐（細幅の織物）の製造で児島唐琴地区に創業したのが始まりと伝えられています。

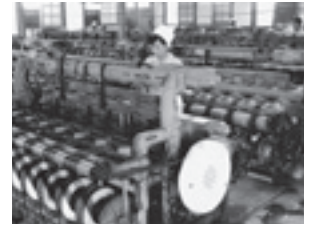
1921年、松井武平氏が光輝縁（艶付け綿糸を使用した無地縁）の製法を浜松から児島唐琴地区に取り入れました。これを機に同地区で畳縁の生産が始まり、高田織物も真田紐から光輝縁へと生産をシフトしていきました。弊社の次の節目は1962年に訪れます。ジャガードを搭載したシャトル織機で、綿の無地にポリエチレン糸で柄出しをした紋縁の製造に成功。その名称を「大宮縁」とし、全国に販売を開始

しました。その後、畳縁の時代は無地縁から紋縁へと大きく変わり、素材の主流も綿から合成繊維へと移り変わっていきました。

1965年には「大宮縁」をグレードアップさせた、高級感あふれる縦糸三重織の「新大宮縁」が誕生します（この畳縁は現在も使用）。さらに1971年、自社でシャトル織機をニードル織機に改造することに成功。現在は電子ジャガードを搭載した高速ニードル織機を導入するなど、高田織物は常に新しい技術を積極的に導入してきました。しかし、織機は新しくなっても、織りにこだわる精神は創業当初から変わりません。伝統を守りながらも、一方では新しい畳縁を模索し、生み出しつづける。それが高田織物の一貫した姿勢なのです。



昭和30年頃 綿糸艶付け工程(上)
昭和30年頃 シャトル織機(右)



PROCESS

風合いまでもチェックして。

畳縁の製造過程を簡単にご紹介します。まず、生産前の準備過程として、織り機にかける糸をつくります。綿糸は艶付け加工（写真左）を施した後、縦糸用のビームに巻きます。ビームを織り機に設置すると、いよいよ畳縁を織る工程です。写真中央は電子ジャガード搭載の高速ニードル織機。作業の多くはオートメーション化されていますが、職人の経験と技術を必要とする工程もあります。そして最後の工程は人の目と手による検品（写真右）。傷はもちろん、風合いも重視した検品が行われます。

1 準備



2 生産



3 検品出荷



2021年	平成33年	初代会頭、その製法を児島唐琴地区に取り入れる。
2017年	平成29年	関東大震災を契機とし、畳縁の需要が飛躍的に伸びる。
2014年	平成26年	満州事変による軍需品の増大を背景に、児島の光輝畳縁生産は福井県に次いで全国第二位となり、全国の約30%を生産するようになる。
2013年	平成25年	三代目高田榎太郎、政府要請による企業統合にて山高織物有限会社を設立する。
2012年	昭和17年	第二次世界大戦中はゲートルや水筒の紐などの軍需品を製造する。
2011年	昭和15年	四代目高田尚浩、高田織物株式会社を設立する。
2010年	昭和13年	この頃、艶付け機の改良、共同施設の設置によって、児島の畳縁は、他の畳縁産地である福井・静岡・富山の三県をはるかに抜いて、日本一の光輝畳縁王国（全国シェア70%）となる。
2009年	昭和12年	高田織物(株)、シャトル織機にジャガードを搭載し、合成繊維使用のジャガード織の紋縁「大宮縁」を開発する。
2008年	昭和11年	シャトル織機をニードル織機に改造することに成功する。《ニードル織機時代の到来》
2007年	昭和10年	設備共同廃棄事業に参加する。
2006年	昭和9年	五代目高田幸雄、社長に就任する。
2005年	昭和8年	オリジナル路線「大宮縁創作シリーズ」を開始する。
2004年	昭和7年	大宮縁の代理店会「大宮会」を設立する。
2003年	昭和6年	織機登録制が廃止される。
2002年	昭和5年	他社に先駆け高速ジャガード搭載の高速ニードル織機の導入を開始する。《高速ニードル織機時代の到来》
2001年	昭和4年	瀬戸大橋が開通する。
2000年	昭和3年	ハウスメーカー、建築設計事務所へ畳縁見本帳のDM開始する。
1995年	平成7年	設備共同廃棄事業に伴う増設規制（六年間）撤廃、自由化時代に入る。
2000年	平成12年	電子制御ジャガード搭載の超高速ニードル織機を導入する。
2000年	平成11年	ISO 9001認証を取得する。（2015年）
2000年	平成10年	ISO 14001認証を取得する。（2015年）
2000年	平成9年	艶付け工場を現住所に移転し、集合化を完了する。
2000年	平成8年	愛知万博クリエイティブジャパン会場から、「国産ジーンズ発祥の地」児島を大発信する。
2000年	平成7年	「大宮会」を解散し、「新大宮会」を設立する。
2000年	平成6年	太陽光発電システム設置する。
2000年	平成5年	畳縁ファクトリーショップ「フラット」をオープンする。
2000年	平成4年	高田織物株式会社 創業 二五周年
2000年	平成3年	光輝畳縁の製法、唐琴を導入 100周年

畳縁を世界に向けて。

昨今、畳以外での畳縁の需要が高まりつつあります。そんな時代の流れを受けて、弊社・高田織物では畳縁のさらなる普及を目指し、世界で初めてとなる工場直営の畳縁専門店「FLAT」をオープンしました(2014年)。この店舗では、1000種類の畳縁を直接手にとることができるほか、財布や祝儀袋、ミニ畳など、畳縁を使用した商品を多数展示販売しています。また、全国生産の80%を占める倉敷市の畳縁は重要な観光資源としても注目されています。弊社・高田織物は「FLAT」を拠点として、倉敷市の産業観光にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

FLAT

TATAMI-BERI FACTORY SHOP

ロゴには「FLAT」のためだけに開発したオリジナルのアルファベット書体を使用しています(上)。モルタルの壁面には畳を思わせるラインが走るなど、随所に凝った意匠を施しました(右)。一歩足を踏み入れると、まず目に飛び込んで来るのが1000種の畳縁を陳列した棚(下)。圧巻です。



児島の歴史、畳縁・高田織物の歴史

六三七年	飛鳥時代	《畳縁の歴史は、畳の歴史とほぼ同じである》 ・隋書東夷伝 倭国の条 「草を編みて薦(こも)となす。雑皮を表となし縁とるに又皮(虎豹の毛皮)をもつてす。」
七二二年	奈良時代	《畳縁の役割》 畳としての品位品性を保つ効果、装飾性や伝統性を高める効果、耐久性を補強する効果などがあり、実用性と装飾性の上から当時、既に不可欠の存在になっていた。
七五九年	天平宝字三年	・日本最古の歴史書「古事記」が完成する。 ・「古事記」の中に、薦、草、皮、綿、木綿畳などの記述あり。 《正倉院にある聖武天皇の御床畳(こも)のたみ》現存する最古の畳
平安時代	平安時代	・「古事記」の「国生み神話」によれば、吉備の児島は、全国で九番目の島として誕生する。 ・「万葉集」大伴旅人の一首 倭道の 吉備の児島を 過ぎて行かば 筑紫の児島 思ほえむかも ・身分により、畳の大きさ、厚さ、畳縁の色、柄が定められる。 ・寝殿造りが普及する。 ・貴族は畳、庶民は筵(むしろ)、藁(こも)の上で生活する。 ・書院造りが普及する。 ・武家屋敷では、寝所に畳が敷き込まれる。
鎌倉時代	鎌倉時代	・小さい部屋割りが行なわれ、畳の敷き詰めが定着する。
安土桃山時代	安土桃山時代	・城郭の造営などの流行により、畳屋敷が形成される。 ・千利休、草の四畳半茶室を作る。
江戸時代初期	江戸時代初期	・数寄屋造りが普及する。 ・畳割りによる建築のモジュールとしての畳が重視される。
元和四年	元和四年	・吉備の児島は、高梁川の河口付近、島の北西地域で、本州と陸続きになる。 ・干拓地には、塩分に強い棉が栽培される。
江戸時代後期	江戸時代後期	・北前船が頻りに下津井港に寄港する。 ・北前船が運ぶ「にしんかす」は、棉を栽培する肥料に使われる。
一八〇〇年	江戸時代後期	・金毘羅山、由加山の両参りで賑わう。 ・小倉帯地や真田紐などの土産品作りが発達する。
一八六八年	明治元年頃	・初代高田徳太郎、個人創業
一八九二年	明治二五年	・引網織物業組合が加入者九二名で結成される。 ・二代目高田幸太郎、理事に選出される。
一九〇八年	明治四一年	・蚊帳とリボンの製造業者であった福井県武生市の山甚産業株式会社、綿糸の加工と染色に成功し、日本最初の「細幅縁」を製出する。
一九一九年	大正八年頃	・艶糸を製紐し、編上靴の紐を輸出していた静岡県浜松市の城北機業株式会社が靴紐の輸出が途絶したのを機に、艶糸を活用した光輝畳縁を考案する。
一九二二年	大正一〇年	・光輝畳縁の製法を浜松で学んだ松井武平(児島商工会議所

